

否定的父親コンプレックスから自立する女性性 ——「手なし娘」の心理学的解釈——

高尾 浩 幸*

The Femininity Arising from the Negative Father Complex: The Psychological Interpretation of Grimm's *Daughter without Hands*

Hiroyuki Takao

1. はじめに

家族とは不思議なものである。人は誰しもひとりで生まれてくることはなく、独りで育つこともない。物心ついたときから、必ず「家族」がいる。しかし、一言で「家族」といっても、その構成はさまざまだし、ましてや家族のメンバー一人一人ともなれば、それぞれが個性を持っているので、考えてみれば、「星の数ほど多様な家族」があるような気がする。

ところが、家族受難の時代とされる今日でも、多くの家庭には「お父さん」「お母さん」と「子ども」がいて、「お父さん」といえば一定のイメージが浮かんでくる。これは、実のところ家族関係では、父親という役割が大きく機能しているためなのである。逆から見ると、家庭の中では、父親個人の個性よりも「父親」役割が期待され機能を果たしているということになる。

つまり、親と子は、例えば父と娘は気づかないうちに、あるルール、パターン、型にはまっていくなるといふことである。この父・娘パターンは、娘の成長によって、娘が父親イメージを取り込み、内在化させていく過程で一層複雑化していく。内在化された父親イメージには、個人的父親から得られた情動、記憶、経験などが付随し、父親コンプレックスを形成する。この父親コンプレックスは、外面的な親子関係が希薄になった後も、ずっと娘の内面にとどまり続け、娘がやがて結婚すれば夫との関係に、子どもをもうければ子どもとの関係に影響を与え、生涯にわたって大きな役割を果たし続ける。

ここでの問題は、このように大きな影響力を持つ父親コンプレックスがときには否定的なものとして形成される場合があるということである。否定的父親コンプレックスは、娘にとって、ある種の生き難さ、内的であれ外的であれ生きていく上での困難として経験されるが、コンプレックスが無意識的であればあるほど、娘にはどうしようもないものと感じられる。

* たかお ひろゆき 文教大学人間科学部

実のところ、内的父親が否定的イメージとなり、否定的父親コンプレックスに振り回される女性の問題は、ずいぶん古くから知られていたようである。今回は、否定的父親コンプレックスを表すものとして、娘の手を切り落とす父親というぞっとする昔話「手なし娘」を取りあげる。グリム兄弟によって採集されたこのお話は、ヨーロッパ各地にいくつものバリエーションが伝わっていたし、日本にもほぼ同型の昔話が言い伝えられてきた。洋の東西を問わず、娘にとっての否定的父親の問題が、人々の心をとらえ続けてきたからであろう。

昔話の心理学的意味とその解釈については、フォン・フランツ²⁾、ヴェレーナ・カスト³⁾らの成書にあたってもらおうとして、本論では、「手なし娘」のストーリーにそって、何が起こり、それがどのように進展し、最後にはいかに解決するかを見ていくつもりである。そのとき、ユング心理学の立場から、登場人物や行為の象徴的意味を探り、否定的父親コンプレックスから主人公の娘が、どのようなプロセスをたどって解放され、自立していくかを読み取っていくつもりである。このような作業を通して、「手なし娘」の物語自体が持つ、癒しと開放的作用をより明確な形で示し、表面をなぞっただけでは見過ごしてしまうかもしれない、その臨床的な作用力と深い魅力を明らかにできるならば幸いである。

2. 物語「手なし娘」

むかし、ひとりの粉ひき男がしだいに貧乏になっていき、とうとう残っているものは、粉ひきの水車と、その後ろに立っている大きなりんごの木一本だけになりました。ある日、粉ひき屋が森に入って、たきぎを取っていると、見たこともないじいさんがやってきて、「おまえの水車の後ろに立っているものと引き換えに金持ちにしてやる」と申し出ました。粉ひき屋は、その男の言っているのは古びたりんごの木に違いない、と考え、同意しました。ところが、相手はばかにするような笑い声を上げ、「3年たったらやってきて、俺のものを持っていくぞ」と言いました。

粉ひき屋が家に帰ると、おかみさんが走って出迎えました。「ねえ、粉ひき屋、教えてよ。どうして、急に、お金がうちに舞いこんだのかしら。何がなんだか、さっぱり分からないわ。」粉ひき屋は何が起こって、りんごの木をやることにしたかを話しました。すると、おかみさんはぎょっとして、水車の後ろに立っていたのは娘で、庭を掃いていたのだ、と言いました。じいさんが欲しがったのが娘ということは、そいつは悪魔に違いなかったのです。

ところで、その娘というのが美しくて信心深く、3年の間、何の罪も犯さずに過ごしました。悪魔が自分をさらっていくという日がくると、娘は、体を清らかに洗い、自分の周りに白墨で輪を書いておきました。こうすると、悪魔は彼女に近づけませんでした。悪魔は娘に近づくために、粉ひき屋に命じて水を取りあげさせました。しかし娘は泣いて両手をぬらすので、清らかなままでした。そこで悪魔は、粉ひき屋に娘の両手を切ってしまうように要求しました。粉ひき屋は驚きましたが、悪魔は言われたとおりにしないと、粉ひき屋をさらっていくと脅しました。怖くなった父親は、娘のところに行つて悪魔の言うとおりにしなければならぬことを話し、許しを請いました。娘は、父親の子だからということで、「お父さんのいいようになさってください」と返事しました。そして、自分の両手を差し出して、父親に切らせました。悪魔は三度目にやってきましたが、娘がとてもしばしば泣いて切られた手を涙でぬらしたので、清らかなままでした。これでは、悪魔も引き下がるよりほかありませんでした。

粉ひき屋は娘に、おまえの犠牲のおかげで大金持ちになったのだから、これから一生の間、大

事にしてあげるよ、と言いました。けれど、娘は、家にいるわけにはいかない、よそへ行こうと思います、と答えました。切られた両手を背中に縛り付けてもらって、日の出と一緒に彼女は出かけました。

娘は一日中歩きどうしたので、お腹がすいてたまりませんでした。彼女は、王さまの庭に美しいナシが鈴なりになっているのを見て、神様にお祈りしました。すると、天使が現れ、庭を取り囲む堀の水を分けてくれました。娘は庭に入り、ナシの実を一つ、口で木からもぎとって食べました。その様子を、この庭の庭番が見ていました。次の朝、王さまが実を数えてみると、一つ足りません。庭番の話聞いた王さまは、その晩、庭番とお坊さんを伴って庭を見張りました。天使と娘が再び現れたので、お坊さんは娘に幽霊か人間なのかを尋ねました。娘は、「私はあらゆるものから見捨てられた哀れな人間ですが、神様だけはお見捨てになりません」と答えました。王さまは、「たとえ世界中のみんながおまえを見捨てても、私は見捨てない」と答えました。王さまは娘をお城に連れていき、娘が美しく信心深かったので、娘が好きになり、結婚し、娘のために銀の両手を作らせました。

一年がたち、王さまは戦争に出かけることになりました。そこで母親にお妃を託し、子どもが生まれたならすぐに知らせてくれることと、王さまが帰るまで二人の世話をしてくれるよう頼みました。やがて、お妃は美しい男の子を産みました。そこで、手紙のやり取りが始まりましたが、使いの者が途中で眠りこんでいるうちに、悪魔が手紙をすり替えてしまいます。まず悪魔は王さまへの手紙を、「子どもは化け物である」とすり替え、次には、王さまからの「妃を大事に世話するように」との返信を、「王は妃と子どもを殺すことを命じる」とすり替えました。悲しみに沈んだ母親は、お妃と子どもを城から去らせます。

お妃は自然のままの大きな森へ入り、そこで再び祈ります。天使によって救われたお妃は、「だれでも、ただで住める家」という看板のかかった小さな家に導かれ、そこで7年間世話を受けます。その間に、お妃の信心深さのおかげで、神様の恵みにより、切り取られた両手も、もとのとおりはえました。

戦争から戻った王さまは、お妃と子どもに会いたがりました。母親は王さまに、妃と子どもを殺すように命じた手紙を見せましたが、そうすることなく二人を森に逃がしたと話しました。王さまは、食べもせず飲みもしないで、二人を7年間捜し求めました。ついに、王さまは二人に会いましたが、お妃が本当の手を持っているので、妻ということが分かりませんでした。しかし、天使がしまってあった銀の手を見せてくれたので、やっと王さまは妻と子どもだということが分かりました。三人は、年とった王の母親のいる城に帰りました。みなが大喜びし、王さまとお妃はもう一度結婚式を挙げ、一生を終えるまで幸せに過ごしました⁴⁾。

3. 貧困化する粉ひき屋

ある粉ひき屋が、しだいに貧乏になっていった。彼の仕事は、水車で麦などの穀物をひいて粉にすることだったが、どうしたわけか仕事がうまくいなくなっていくた。

水車は、機械を使って、水の流れをひきうすを回す動力に変換し、穀物を粉に変える。現在の日本ではめったに見かけないが、この機械の出す音が相当にうるさいため、水車小屋はよく村のはずれにあった。村はずれの寂しい場所、境界には、泥棒や幽霊が現れたり、あるいは恋人たちが人目を避けて逢瀬を交わしたりするところであった。粉ひき屋とは、場所からいって共同体の

はずれ、境界で仕事をする人、つまりマージナルマンであったのだ。

次に、粉ひき屋は機械の製造と管理にたけていた。いったん機械がうまく動くようになると、彼は自ら骨をおることなく穀物をひき、労賃として一定の穀物を得ることになる。機械というトリックを使ってエネルギーを変換する点は、メルクリウスのであり、自然エネルギーを人間のために有効利用する機知を表す。一方、農民から見ると、彼は「働かない」人間に見えたとし、機械を操る能力は「悪魔的」にさえ感じられるものであった。実際、粉ひき代金を吊り上げ、粉ひき屋が不当に豊かになることもあったため、いっそう村人から嫌われることにもなった。

こうしてみると、粉ひき屋という仕事は確かにどこか「悪魔的」なところがあり、善良な倫理観を持たないと人間性を失う危険と隣り合わせの仕事と言えるであろう。そうした特徴を備えた粉ひき屋が仕事に行き詰ってしまい、残っているものは水車とりんごの木だけになってしまった。いったいどうして彼は貧しくなっていったのだろうか？ 水車があるのだから、仕事はできるはずである。すると、村人がもう彼のところへ来なくなったのであろうか。彼の強欲に村人が嫌気をさしたのかもしれない、別に新しい粉ひき屋ができて、その商売敵に客を奪われたのかもしれない。貧困の具体的な理由は書かれていないが、そのヒントとして、大きなりんごの木が残っていた。

西洋では、りんごに古来よりさまざまな象徴的意味が付与されてきた。りんごは豊潤な香りと味覚をもたらしてくれ、しかも球形をしていることから、地上的な欲望と歓喜の満足を表す。また、りんごは愛と美と豊穡の女神ビーナスの持ち物（アトリビュート）⁹⁾ であって、性的快楽とその実としての豊穡を意味する。さらに、聖書の創世記によれば、エデンの園の中心にあった木から、イブとアダムが実を取って食べたところ、二人の「目が開かれ」、善悪を知るようになったという。この木がりんごの木とみなされたことから、りんごは認識と知恵をもたらすことができると考えられてきた。

こうした象徴性を備えたりんごの木を、粉ひき屋はいとも簡単に手放そうとするのだから、まったく軽視していたに違いない。つまり、彼には地上的な欲望や歓喜を楽しむこと、性愛性の基本となる他者と関係を結ぶ能力、そして選択を通して知恵と認識を得ること、に問題があったと考えられる。

仕事上の不具合とは、ユング心理学でいうところの「ペルソナ」の問題だが、その原因はさまざまである。粉ひき屋の場合、働くには働いていたのだろうが、何のために働くのか、働いた結果どのような楽しみを得るのが分からなくなっていたのではないだろうか。無目的な労働は次第に機械的な単調なものとなり、やがて文字通り彼は水車という機械の一部になっていったのかもしれない。人間は機械ではないのだから、働くには動機、つまり働くことによって「良かった、楽しい」と感じられる何かが必要である。このような動機を欠いた労働は、ほどなくやる気を失わせ、質的な低下を招くものである。

また、もともと水車小屋は村はずれにあるのだから、粉ひき屋が村人と関係を結ぶことに注意を払わない限り、容易に孤立し孤独に陥ってしまうことは想像に難くない。エロスを象徴するりんごの木を軽視していたことから、彼はお客との関係を大切に築いてこなかったのであろう。

さらにこの関係性の不足は、彼と妻の間にも言える。粉ひき屋は、困窮について妻と相談してはいないようである。責任感が強かったのかもしれないが、じりじりと進む貧困化を彼は独りで対処しようとし、やがて森に入っていった。現在でも「女は男の仕事に口を出すな」という態度をとる男性が多いのではなかろうか。仕事が順調なときはそれでもよいのかもしれないが、うまくいかなかったならば、一番身近にいる妻と話し合ってみることが変化のきっかけになること

もありそんなことである。なかなかそうできないのは、おうおうにして男性側のプライドの高さが災いしているからであろう。

貧困の末に、粉ひき屋は森にたきぎを取りに行った。ドイツには今なお「自然そのまま」の手つかずの森が多く残っている。日本の森と違って下草が生えないので歩き回りやすいが、うっそうと生い茂った木々のために昼でも日がささず、うっかりすると出口の方向が分からなくなってしまう。薄暗く、見通しがきかないことや、木々が深く根を張っている様から、森はしばしば「無意識」を表すとされてきた。また、森には恐ろしい動物や怪物が住むとも考えられたので、無意識の恐ろしい側面が現れてくる場所でもある。粉ひき屋は仕事に行き詰まり、無意識に退行したわけだが、そこで老人の姿をした悪魔に出会う。この意味で、悪魔は粉ひき屋の暗い、怪物的な側面（無意識に潜む影）であるとも言えよう。

老人はさっそく、「水車の後ろに立っているもの」と引き換えに「金持ち」にしてやる、と取り引きを持ちかける。何と魅力的で、しかも安易な取り引き、解決法だろうか。現実世界で立ち行かなくなったとき、無意識世界に退行する中で、私たちはしばしば「魔法のような解決法」を夢見る。「宝くじに当たる」「お金持ちのおばさんから遺産が入る」「いちやくスターになって」など。その実現に努力が必要なのは分かる・・・少しの努力なら・・・宝くじを買うくらいなら・・・いや、馬券のほうが、もうけがもっと多いらしい・・・。悪魔の囁きは、「濡れ手で粟」「一攫千金」をそそのかすが、良識がその危うい一歩にブレーキをかけるものである。しかし、あまりに意識が曇らされ、良識が働かないとき、悪魔との取り引きに乗ってしまうことにもなりかねない。

その際、悪魔の求める代償は、一見小さなもののように見えて、実は「取り返しがつかないほど、自分にとって価値のあるもの」なのである。悪魔は人間をだますことは考えても、真に人間の益になるような提案をするはずがないから、「悪」なのだ。

粉ひき屋は、「金持ちになる」の対価を「りんごの木」と思ったが、実際は「娘」であった。父親にとっての娘が、子どもと異性という点から、保護と愛情の対象となるならば、実のところ「娘」とエロスを象徴する「りんごの木」は、同じものを表している。父親の意識の上では「りんごの木」であり、物語上は「たまたま娘が水車のうらで、庭を掃いていた」ことになっているが、無意識的には父親が娘を売って、金に換えたのだ。このような実例を、ギャンブルにはまっていく男たちに見ることができる。「大金」を夢見て、家族に渡すお金はもとより、やがては妻の財産から持ち物、はては娘を売ってまで賭け事に熱中する父親がいる。ギャンブルでなくとも、「仕事中毒」の男性たちも似たところがある。家族のために働いていると言いながら、やがては家族と共に過ごすよりは仕事をするをいつも優先するようになるならば、「お金」のために「娘」を犠牲にしたこの粉ひき屋と五十歩百歩と言えはしまいか。

さて、粉ひき屋が悪魔と契約を交わし、家に帰ってみると、妻が出迎え、急に家中にお金があふれだしたことを不審そうに話す。妻には健全な批判力が残っている。この「何かおかしい」という直観はとても大切だ。お金に目が眩むことの本当の恐ろしさは、自然に備わったこうした直観力が失われ、ひどく狭い視野のまま破局に突き進んでしまうところにある。

結果として娘は悪魔に売られてしまう。ユング心理学の立場からは、娘を父親のアニマと見なして物語を読み解くこともできるが、ここでは主に主人公である娘がこうした家庭状況で育ったとき、どのような課題を背負い、そこからいかにして成長していくかを見ていきたい。

初めの状況から、娘にとっての父親は次のような存在であった。つまり、自然エネルギーを交

換して人間の役に立てる仕事（粉ひき）に行き詰まり、無意識（森）に退行するなかで、影（悪魔）と取り引きをし、将来の可能性とアニマ（子ども・娘）を売ってエネルギー（大金）を得た父親だった。現実の世界でも、子どもは親の影響を強く受けて育つ。親とて完全な人間であるはずもないが、親の側に未解決の問題が大きければ大きいほど、子どもはその影響を「発達の」に被る。親にそのつもりがなくても、子どもは親の問題を課題として背負ってしまうところに、家族の複雑さ、宿命性がある。しかし、かといって家族なしに育てば、やっかいな問題もなく「幸せ」かといえ、そうとも言えず、それはそれで別種の困難を招いてしまうこともよく知られているところである⁹。つまり、人間が生きていく、成長していくのに「理想的な」環境が定まっているわけではなく、与えられた家族状況をどのように乗り越えていくか、にその人の幸せも不幸もかかっているとと言えるのだ。

手なし娘の場合、父親は先に述べたような特徴を持った否定的存在であった。心理的にいうならば、否定的な父親、否定的父親コンプレックスを持った娘が、そこからどのように成長し、自立した大人の女性になっていくかがこの物語のメインテーマと捉えることができるであろう。

4. 娘の手を切り落とす父親

3年経った。この間、信心深い娘は、神を敬い、罪を犯さなかった。娘の信仰深さは、キリスト教文化の影響だけではないであろう。娘にとっての父親像の心理的意義として「理想と価値観の発展」¹⁰があるが、父親は世界を構成する価値観、ひいては子どもの世界観・宗教観をも導き出す役割を担う。その父親が自らの欲深さのために悪魔と契約を結んでしまったのだから、娘の人間的なお手本とはなり得ない。勢い、娘は神への直接的な信仰心を発展させ、時として不釣り合いなほどに熱中することもある。臨床的に言うならば、宗教的な熱心さの影には否定的な父親像があるのかもしれないのである。

娘は悪魔に対抗して、身体を洗い、自分の周りに白い輪を描いた。日本でも古来より「禊ぎ」と呼ばれるように、身体を洗うことは、自分の内面の悪を洗い流して清める行為である。また、輪はその丸い形より「完全、永遠、天国」を表すが、ここでは特に「保護」を意味するのである。

悪魔に対抗するのに、娘が魔術的・儀式的方法を用いているのは興味深い。悪魔が心理的に作用してくると、父親がそうなったように、当人を奴隷状態に陥れる。悪魔は心理的には、「否定的なコンプレックス」と同じように作用してくるわけで、逆にコンプレックスに対して、魔術的・儀式的な方法が対抗手段になりうるということである。実際に、強迫神経症の方が「ガス栓が閉まっていないのではない」「誰かを傷つけてしまったのではないか」といった強迫的な不安に対して、儀式的行為や魔術的な文言（祈りのようなもの）を行なうことで不安をおさめようとするのは、この実例といえる。

さて悪魔は娘に近づけないため、父親を脅して、水を取りあげさせ、ついには娘の両手を切らせる。ここでの父親は、文字どおり悪魔の手先となって、娘の防御（防衛）を剥ぎ取っていく。娘の両手を切り落とすところなどは、父親自身が悪魔に見えてくるが、それにも増して、ここでの娘の態度にも驚かされる。「お父さんのいいようになさってください」と両手を差し出し、切らせているのだから、いったいどういう父-娘関係なのだろう。

「手」は人間の活動に極めて重要である。二足歩行となって、手を自由に使えるようになった

ことで、人間の文明がいかに発展したかはよく知られているところである。手を使うことで、人間は外界に働きかけ、自分の思うように世界を変えてきた。「手」は自分と外界をつなぐもの、特に外界への働きかけ（能動性）と活動の手段を表す。また、手は王のエンブレムであったことから、権力や統治の象徴でもあった。「手をつける」という言い習わしからは、手が所有権を表すことが分かる。

これらの手の象徴性から、父親が娘の能動性、活動手段、権威、自己統御、所有能力を剥奪したと考えることができる。ここに否定的父親像の特徴がよく現れている。心理的にいうならば、否定的父親コンプレックスが作用するとき、娘は自発性を失い、どうしたらよいのか分からず、自分に自信がなく、自分に何かできるとは思えず、自分が当然価値のあるものあるいは地位を得ることができない、と感じてしまうのである。娘が父親に手を差し出して、切らせているのは、この娘がまれにみる「良い子」だったというより、すでに否定的父親コンプレックスの影響によって「自分の価値」を見失い、自分を守ることができなくなっていたからであろう。悪魔に対してはあれほど抵抗できたのに、父親にはなすすべがなかったのだから。

父親は大金持ちになった。娘の両手と引き換えに得た大金に負目を感じたためか、父親は「これから一生のあいだ、おまえをなにより大事にしてあげるよ」と言った。一見もったもなしに見えるが、こうしたギヴ・アンド・テイクの親子関係から、家庭内暴力を起しているある娘の言い分が連想されてくる。その娘は、「自分は小さいころ両親に愛されてこなかった、だから今こんなに情緒不安定になって学校にも行けない。イライラしてしょうがないから、本来与えられるべきだった愛情として、〇〇を買え、私の言うことは何でもかなえてくれ」と言うのである。この要求はエスカレートしていき、ついには親でもかなえられなくなると、そこから暴力が始まった。この両親に有り余るほどのお金があれば、娘は満足したのだろうか？ そうではないであろう。そもそも愛情をお金で買えるはずがないのに、お金を求める娘、何でも買い与えてきた親に根本的な勘違いがあったのだ。

手なし娘の父親も愛情の欠如をお金で埋め合わせようとしている。もしここで彼女が父親の庇護のもとにとどまったならば、自らの主体性（手）を取り戻すチャンスもなく、ずっと否定的父親コンプレックスに取り込まれたままの将来しか描けなかったことであろう。

5. 娘の旅立ち

手のない娘は独りで旅立った。何と無謀な出立であろう。しかし、ここに人生のパラドックスが隠されている。「手がない」という大きなハンデをかかえながらも、それまでの家族関係から出て行かない限り、娘にとっての新しい成長はありえない。否定的父親コンプレックスにとらわれていた主人公は、新しい経験と変化を求めて、旅に出る。

娘は家を出て、一日中歩き続け、やがて王の庭に来た。その庭には美しい果物が鈴なりになっていた。「庭」は、無意識を表す森とは反対に、秩序ある自然を形作り、意識を象徴する。王がその国や文化の代表者という集合的存在であることを考え合わせるならば、「王の庭」は正に「集合的意識」を表すものである。家を出た娘が王の庭にたどり着いたことには、何か意味があるのだろうか？

先に、娘にとっての父親像は、理想と価値観の発展に関連すると述べた。手なし娘の場合、否定的父親コンプレックスのために、内的父親像も否定的なものとなり、未発達のままであったと

考えられる。個人的な父親体験から内的父親像が発展していかない場合、しばしば元型的（集合的）な父親イメージが膨らんでいく。ある国の「父」とも称される王に娘が接近し、しかも王の庭にたどり着いたことには、娘が集合的意識に触れる意味があったのであろう。

王の庭には、果物が鈴なりになっていたことから、この王が豊穡と精神的豊かさに恵まれていたことが分かる。娘は天使の助けを借りて、王の庭に入り、そのあったナシの実を食べた。洋ナシの場合、その形が女性的だし、また花が純白であることから、良妻賢母の手本となるイシス（エジプト）、ヘラ（ギリシャ）に捧げられてきた。空腹にさいなまれた娘が、母性を象徴するこのナシを食べたことは印象的である。

家を出た娘は、とたんに父親の庇護を失い、心理的に言うならば心的エネルギー源から断ち切られて、空腹に陥った。お腹がすくのはつらいものだし、そのままでは死んでしまいかねない。そこで娘は、王の庭にあるナシを食べることで、集合的意識の成果である女性的・母性的エネルギーを取り込んでいる。ここに臨床的に有益なヒントが隠されているように思われる。

否定的な父親コンプレックスを持つ娘は、そうたやすくは父親から離れることができない。父親から離れるや否やすぐに「飢えて死んでしまう」苦しみを味わうからである。この時、父親の束縛的な庇護に代わるものとして、集合的な女性的エネルギーが与えられると、娘は次の段階へと進むことができる。女性的エネルギーは、この物語では「王の庭のナシ」に象徴されているが、他にもキリスト教会のマリア・イメージあるいは日本での観音像イメージが挙げられる。実際に否定的な父親体験を持つ女性が、こうした宗教に救いを求めることはよくあるのではないだろうか。

この場面で娘は、ある意味ナシを「盗ん」でいる。しかしその無断借用は「食べたのは一つだけで、それ以上は食べませんでした」と、大変慎ましやかなものであった。盗むことは倫理に反する良くないこととされているが、この場面は聖書の創世記に記されている「アダムとイブ」の物語に似ている。イブは蛇にそそのかされて、エデンの園の中央にある禁止された「木の実」を食べてしまった。神の定めに従ったため、神はアダムとイブをエデンの園から追放した。イブのこの行為は人間の「原罪」となったのだが、実を食べたことで「目が開かれた」と記されているように、人間に新しい覚醒段階をもたらした。また、ギリシャ神話には、プロメテウスが神々より火を盗み出して人間に与えた話がある。つまり神話的にみると、人間にとって大切なもの・不可欠なものは最初、神より「盗む」ことによって得られたことが理解できる。

主人公の娘がここで木の実を盗んだのは、必要不可欠だったからであり、その証左として「一つ」で満ち足りたのであった。人間にとって本当に必要なものを得ることと「食欲」とを区別することが大切だ。確かに盗むことは、倫理に反するし、場合によっては罰を受ける。しかし、どうしても必要に迫られての「盗み」は、不必要なものをむやみに欲しがる食欲と区別され、主人公の新たな次の一步を踏み出す契機となる。実際に、なくなったナシに気づいた王は、次の晩自らが庭で待ち伏せし、娘と遭遇することになる。

娘を見つけた王は、城に連れ帰り、娘の美しさと信心深さから結婚する。そして王は、娘のために銀の両手を作らせた。娘の美德は王に受け入れられたが、この結婚話はどうもとんとん拍子に進み過ぎたきらいがある。美しさはもちろんのこと、信心深さも態度から見えやすいことから、王は娘の表面的な魅力にひかれて結婚したのではないだろうか。もっとも現実的な結婚も、最初は多かれ少なかれ、そのようなものなのだろうが・・・。

ここで、王が作らせた「銀の手」から、アイルランド神ヌアダの物語が連想される。ダーナ神

族の指導者であったヌアダは戦いで腕を失ったため、支配者としてふさわしくなくなってしまったが、治療神ディアン・ケーフトによって銀の腕を与えられ、これによって王位に復帰したのである⁹⁾。ヌアダの場合、銀の腕は王の権威を取り戻すために必要であったが、私たちの物語においても、娘に銀の手が与えられたのは、「王妃としての権威」の付与にほかならなかったであろう。

そもそも「銀」は、月、水と関係があり、女性原理を表すのにふさわしいが、一方では冷たく受動的な印象を与える。娘に与えられた銀の手は、その国のファーストレディーとしての「王妃」にはふさわしいものであったが、娘自身のためになったのかどうかは定かではない。むしろ、往々にしてあることとして、「王妃」としての役割が重すぎて負担になったのではないだろうか。以前に「手」を失うことが、自発性や周囲への働きかけの能力を失うことを象徴すると述べたが、銀の手では本当の意味で娘自身が周囲にかかわることができなかったのではないと思われる。

否定的な父親から逃れた娘が、王という集合的原理に接近し結びついたことにより、集合的エネルギーを得て飢えることはなくなったが、それと同時に「銀の手」という重荷を背負い込んだのは示唆的である。「手なし娘」が、否定的父親コンプレックスをかかえた女性の成長過程を表しているとするならば、まず集合的地位につき、その重荷を引き受けることから始めるもの、というヒントを得ることができよう。こうした役割を得ることは、ユング心理学でいうところの「ペルソナ」問題だが、ペルソナの発達は青年期の重要課題の一つである。否定的父親コンプレックスをかかえた手なし娘の場合も、この点で例外ではない。親のもとを離れ、まずは自分のペルソナを身につけることが求められる。言い換えるならば、世間に受け入れられる自分の立場を築くということだ。

最近「トラウマ」という言葉が広がり、一般のメディアにも登場するようになり、心理学の専門家以外の方もよく使うようになってきた。トラウマとは「外傷」を意味し、今日では「心の傷」の意味で用いられることが多い。そしてこの「心の傷」に苦しめられるため、そこからいかにして癒されるかが大きな課題とされている。手なし娘に見られるような否定的父親コンプレックスも、トラウマとなりえる。父親に手を切り落とされるくらいだから、大きな痛手を被ったに違いない。

心の傷が余りに大きく、つらすぎる場合、カウンセラー（分析家や臨床心理士）に相談することがある。そこでのやり取りはケース・バイ・ケースであろうが、この物語は、トラウマの取り扱いがまず心の集合的なレベル、つまりペルソナ問題にある、と明瞭に述べている。物語を読み進めると分かってくることだが、手なし娘個人の、もっと内的な癒しは、後半に現れてくる。社会とのかかわり、つまりペルソナ問題に取り組み、そののちにより個人的な課題に向かう、というのが昔話の流儀なのである。そして、この順番は、「手なし娘」の物語に限らず、他の多くのグリム物語にも共通しているのは大変示唆的だ。

つまり、トラウマがあるからといって、まずその心の傷を癒し、健全になってから社会に出て行くという道筋は、一見合理的に見えるにもかかわらず、実のところ人間存在の実態からかけ離れたものと言わざるをえない。まずは社会的立場を獲得すべく努力することが大切である。もちろん心の傷ゆえに、そこには困難が伴い、なかなかうまくいかないこともある。そうした戦いの中から自分に気づき、時にはカウンセリングなどの援助を受けることも必要となる。しかし、できる限りペルソナ確立に向けて努力することが、その人個人にとってのトラウマの意味の変化に欠かせない。もちろん、事例によってはすぐに社会的活動に取り組みない場合もあるには違

ないのだが、臨床的にも、心の傷のつらさを受け止めることと並行して、可能な限り社会的能力の活用を探ることが大切である。この点でも、長い間民衆に培われてきた知恵としての昔話には、聞くべきところがあると思う。

6. 城を離れて

娘と結婚して一年がたつと、王は戦争のために出かける。王の留守の間に、妃は男の子を産む。夫婦のうち、男（夫）は戦争（仕事）に出かけ、女（妻）は家で出産（育児）に携わるのは、グリム童話が古い時代に成立したからだけではないであろう。王と妃という「役割」に同一化している度合いが強いため、彼らは自分の望むことというよりは、「王」として「妃」として期待されていること、しなければならないことを優先して行なうことになったのである。

男の子誕生の知らせが戦地の王に送られるが、その手紙が途中で悪魔によってすり替えられてしまう。「手紙」は、伝達そしてコミュニケーションを表す。つまり、手紙が悪魔によってすり替えられたということは、娘と王のコミュニケーションにじゃまが入ったことを意味する。以前に述べたように、悪魔が父親の影を表すと考えるならば、この場面は、父親コンプレックスの暗い側面に影響されて、娘が王の表す集合的意識と連絡が取れなくなったことを表すということであろう。

この干渉が、男の子の出産の後に起こってきた点に注目してみよう。出産は、女性にとって特別で特権的な経験である。男性にはできず女性にしか可能でないこの体験は、女性性の核心を形成する。妊娠から出産に至る10ヶ月間の経験は、実はかなり複雑なプロセスを経るのだが、その根底には本能の作用がある。

王に代表される集合的意識は、必ずしも「本能」を排除するわけではないのだが、本能を従えコントロールしようとする。この関係を表すよく知られたイメージは、「馬を御する乗り手」である⁹⁾。「馬」に象徴された動物的本能を人間が制御して、人間の思う方向へと馬を導いていこうとするのである。このためには、馬と人間との間に信頼関係が必要なのだが、私たちの物語では、悪魔の介入によって、関係が乱されている。心理的に言い換えると、否定的父親コンプレックスを持つ女性自我は、本能的体験にさいして、集合的意識との連絡を取ることが困難になっていく、ということである。

このことの意味を臨床的側面から考えてみよう。人間にとって代表的な本能の作用は、食欲と性欲として現れてくる。食欲と神経性食欲不振症については他でも触れた¹⁰⁾ので、ここでは性欲について取り上げてみよう。父親コンプレックスに関しては、否定的な「父親」体験が、娘の性的心理発達を阻害することが指摘されている¹¹⁾。この場合、心理的に十分な性的準備のできていない娘が、急に結婚、妊娠、出産といった性的体験をしてしまうと、心が身体の変化についていけないことが起こってくる。この乖離体験は、父親像の否定性が大きければ大きいほど、強く出現し、当の女性を苦しめるのではないだろうか。

王からの「お妃を大事に世話してあげるように」という優しいメッセージが、悪魔によって「妃も子どもも殺してしまえ」とすり替えられたところには、父親コンプレックスの別の特徴が表れている。それは、単にコミュニケーションが阻害されるだけでなく、「悪意のあるメッセージ」にすり替える作用があるということだ。

日常生活でも、自分の言った真意が伝わらず誤解されることがしばしば経験される。言い方が

不十分な場合もあるが、分かりやすく言ったはずなのに、妙な意図を感じ取られて悪意ある発言と受け取られてしまうこともある。このように曲解する一つの要因として否定的父親コンプレックスの存在がある。この場合やっかいなことに、コンプレックスに影響されていることに当人は気づいていないので、歪んだ受け止め方をしているとは全く思わず、「本当に悪意のあることを言われた」と感じてしまう。このようなとき、「あなたには父親コンプレックスがあるでしょう」などと指摘すると、よけいに感情を刺激することになってしまうが、この視点は少なくとも相手を理解する助けにはなる。

すり替えられた王の手紙に対して、王の母親がそのまま従うのではなく、妃と子どもを城から逃がした。娘の原家族では、父親の非情な行為を母親が止めなかったのに対し、ここでは父親コンプレックス（悪魔）の悪意が王の母親によって緩和されていることは注目に値する。母性的庇護の力が、まだ不十分なながらも娘を守ろうとしたのだが、それでも娘は集合的意識の場である城を去らねばならなくなった。

7. 森の中へ

王の母親の情けによって、妃は命を救われたが、子どもと一緒に城を出て、自然そのままの大きな森に入っていった。娘にとっては、不本意ながらも二度目の出立である。最初は父親の家から、二度目は夫でもある王の城から。この「二度の放逐・出立」は、ほかの昔話や神話にもよく現れてくる。これは、単に物語に起伏を持たせる修辭的レトリックだけではないであろう。一度目の放逐は、親の家、つまり心理的原家族から離れることであった。その行き先は、王の城、集合的価値・規範への接近である。そこでは、集合的な世界での自分の位置、立場、つまりペルソナを身につける必要があった。ところが人生の不思議なところなのだが、せっかく築いたペルソナを奪われ、捨ててまで、更なる旅を続ける必要がある。今度は、深い森の中へ。

娘が入っていった「自然そのままの大きな森」とは、人間の手がつかない自然そのままの深い深い森である。森は、暗く木々が深く根を張っていることから、「無意識」を象徴するといわれるが、この森は個人の無意識というよりも、もっと人間一般にとっての「集合的無意識」に近いイメージである。森にはまた、恐ろしい魔物や怪物が住んでいたり、逆に妖精や精霊が住むところともされる。いずれにせよ、通常の日常生活では出会わないものに遭遇するところなのだ。無意識との出会いとは、そのようなことを引き起こす。

森の中で、娘は天使に導かれ、小さな家に住むことになる。私たちも、外出してから自分の家に帰ると、なんとなくホッとする感じがある。それは、「家」が安全を提供してくれる、避難所としての性質を持つからである。保護してくれる側面からは、母親の庇護も連想される。

お妃と子どもは、この家で7年間、天使に優しく世話をしてもらいながら過ごす。お妃の原家族を思い返してみると、ここに実の母親と天使の世話との対比を見て取ることが出来る。父親は虐待的といえるが、母親はそうではなかった。しかし、不思議なことに、父親が娘の手を切ることを母親が止めたふしがない。母親はそこにいたはずである。しかし娘を守ろうとはしなかった。現実の虐待の場合もそうだが、否定的父親コンプレックスの場合も、バランスをとるべき母親の機能が弱いとき、事態はより悲劇的になってしまうものである。

この観点から、ここで娘が深い森の中の家で保護されたことの臨床的意味が見えてくる。否定的父親コンプレックスに深く傷ついた自我は、無意識の中で、母性的庇護と世話を受けることで、

真の癒しと回復を経験するようである。それは、具体的には肯定的な母親体験をし、肯定的な母親コンプレックスが育ってくるということである。しかもこの経験には7年間という長い時間が必要であった。十分な時間をかけたこの経験が娘の真の癒しになったからこそ、切り取られた娘の両手が元のように回復したのであろう。

娘の住んだ家には、「だれでも、ただで住める家」という看板がかかっていた。この家は、どんな人であろうと、どんな性格であろうと、どんなに貧しくても、どんな過去であろうと、受け入れてくれる。しかも、家賃を求められることがない。つまりこの家は、家賃と取り引きで提供されるサービスではなく、神からの「恩寵」として一方的に与えられる恵みなのである。しかし、いったん集合的基準に即してペルソナを身につけた人は、なかなか「無償の恵み」を受け取ることができない。一般社会でも「ただより高いものはない」と言うように、何か裏があるのではないか、だまされるのではないかと用心してしまう。この意味で、実は母性的な「無償の愛」を受け取ることが、第一の関門なのだ。ペルソナにしがみついている人には大変難しいことであろう。何でも、愛さえもお金で買えると思っている人には不可能なことだ。新約聖書の中で、キリストは「金持ちが天国に入るのは、らくだが針の穴（門についている小さな木戸）を通るよりも難しい」と言っている通りである。社会的な取り決めに従う生活は大切である。しかし、魂の癒しを求めるならば、それとは次元を異にする無意識の世界に入り、母性的な無償の保護を経験することが必要となってくるのである。

8. 王の探索の旅と大団円

戦争から戻った王は、妻と子どもが城を出たことを知る。王は、二人を捜し求める旅に出て、7年間、食べもせず飲みもせずに、あちらこちらを巡り歩いた。主人公の手なし娘からみるならば、夫である王はアニムスとみなすことができる。すると、ここは、娘にとっての男性イメージが自律的に動いている箇所と捉えることができる。

王が食べもせず飲みもしないのは、肉体的な側面を無視するやり方である。食べたり飲んだり、生命を維持するための最も重要な活動であるから、ここでの王は、肉体を超えた精神的存在として旅に出たことになる。実際に断食は、神への誓願や宗教的修行でも行われることから、王は肉体的な自分が属する王国を抜け出し、超越した世界に妻と子どもを捜し求めたのであろう。

アニムスは、よく女性にとっての精神性を表すといわれているが、ここでの王は、明瞭に肉体的性を超えている。私はここに、悪魔と取り引きしてまでお金持ちになった父親との対比を見い出す。娘を売ってまで現世的な利益を求めた父親に、娘は深く傷つけられたが、それでも娘にとっての「男性イメージ」の根底にはその父親しかいなかった。娘は深く森の中で、「新しい男性イメージ」と出会う必要があったのである。王は集合的意識を表す存在として、それだけでは娘に固有の、娘の個人的な男性イメージとはなりえなかった。アニムスとしての王が、積極的に娘を探す動きをするところに、娘の中に自分を個人として認めてくれる男性イメージが育ってきたことが見てとれる。

王は7年間も旅をする。「7」という数字は、完全数8に至るダイナミックな動きを表す。7は精神的秩序の全体、エネルギーの全体、しかも主として霊的秩序のエネルギー全体を指し示す。この数字により、娘が母親的庇護に癒されている間に、アニムスの動きが補完的に霊的な秩序完成の働きをしていたことが推測される。あたかも時が満ちたように、王は妃のいる家を訪ね、妻、

子どもと再会する。

こうして、王と妃、王と子が再会して、王の国に帰り、もう一度婚礼を挙げた。この「二度目の結婚」のテーマは、グリムの昔話によく出てくる。一度目の結婚が、外面的、社会的、身体的結婚とするならば、二度目の結婚は、より内面的、個人的、精神的な結婚と考えられる。娘の深い傷が癒され、同時に全体的な秩序が回復したゆえに、二人は「一生を終えるまで幸せに暮らしました」と物語は終結を迎える。

ここまでの物語をたどってみると、否定的父親コンプレックスが娘の人生にどのような影響を与えるのか、そしてそこから娘が自立し解放されていくのに、いくつもの段階を経ていくことが分かる。実際のところ、コンプレックスからの解放は決してたやすいものではないが、「手なし娘」は私たちに希望の道筋を照らし出してくれる。

注記

- 1) 高尾浩幸：『日本的意識の起源——ユング心理学で読む古事記』、新曜社、2001
- 2) M-L. フォン・フランツ：『おとぎ話の心理学』、氏原寛訳、創元社、1979
- 3) マリオ・ヤコービ、イングリット・リーデル、ヴェレーナ・カースト著：『悪とメルヘン——私たちが成長させる“悪”とは？』、山中康裕ほか訳、新曜社、2002
- 4) 抄訳は筆者によるが、「手のない娘」、大塚勇三訳『グリム童話1』福音館書店、1986、275-290頁を参考にした。
- 5) 例えば、ブロンツィーノ「愛の寓意」1545、The National Gallery, London. 諸川春樹監修：『西洋絵画の主題物語Ⅱ 神話編』、美術出版社、1997、55頁
- 6) 娘にとっての父親不在については、次を参照せよ。エヴァ・セリグマン「半分だけ生きる人たち」、アンドリュー・サミュエルズ編：『父親』、小川捷之監訳、紀伊国屋書店、1987、107-144頁
- 7) 高尾浩幸：『娘にとっての、父親および父親元型の持つ心理的意味』、人間科学研究、27、7-18頁、2005
- 8) アーサー・コットレル：『世界の神話百科』、ギリシャ・ローマ/ケルト・北欧、松村一男ほか訳、原書房、1999、266頁
- 9) ジグムント・フロイト「自我とエス」、フロイト著作集第6巻、井村恒郎訳、人文書院、1970、263-299頁
- 10) 前掲、高尾浩幸：『日本的意識の起源』、166-170頁
- 11) アンドリュー・サミュエルズ編：『父親』、小川捷之監訳、紀伊国屋書店、1987